HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モンゴル語の存在・コピュラ動詞のテンス・ムード用法について : 日本語のムードの「タ」との対照を通して
Author(s)	伶, 艷
Citation	北方言語研究, 5, 171-190
Issue Date	2015-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/58353
Type	bulletin (article)
File Information	10Ling YAN.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 5: 171-190（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2015）

モンゴル語の存在・コピュラ動詞のテンス・ムード用法について
－日本語のムードの「タ」との対照を通して－

伶　　艶
（岡山大学大学院博士課程）

1. はじめに

1.1 研究の背景

一般的に日本語では、「ル」形とは現在・未来の状況、「タ」形とは過去の状況を描写する際の文法辞とみなされている。モンゴル語[1]では、日本語の「ル」形には -na が該当し、現在・未来（非過去形）を表す。「タ」形には -ba/-laa/-ǰai/-γsan が該当し、過去を表す。しかし、以下のように、非過去形と過去形が両方使用可能な場合がある。

(1) a. Aa！　ende　**bai-na.**
　　あっ　ここ　EX.V-NPST
　　「あっ！　ここにある。」
　b. Aa！　ende　**bai-ǰai.**
　　あっ　ここ　EX.V-PST
　　「あっ！　ここにあった。」

(2) a. Aa！　tegün-ü　yabuqu　edör　marγaši　**bai-na.**
　　あっ　彼-GEN　行く　日　明日　EX.V-NPST
　　「あっ！　彼の出発日は明日だ。」
　b. Aa！　tegün-ü　yabuqu　edör　marγaši　**bai-ǰai.**
　　あっ　彼-GEN　行く　日　明日　EX.V-PST
　　「あっ！　彼の出発日は明日だった。」

例文 (1) (2) のような状況においては、bai-na という非過去形も bai-ǰai という過去形も使用可能である。話し手の驚きを表す間投詞の「あっ！」と共起することからも例文 (1b) (2b) は、テンスの観点から過去のことを述べているとは言い難い。またアスペクトの観点からは「完了」という概念を用いても、うまく説明が付かない。(1b) は発話時現在に成立しているにも関わらず過去形によって表現され、(2b) は実際には過去の事態を表していないにも関わらず過去形によって表現されているからである。

日本語でも、例文 (1b) (2b) と同様の表現が可能である。このような過去形は日本語ではいわゆるムードの「タ」と言われている（金水 2001、井上 2001、定延 2004 など）。

本稿では、モンゴル語のテンス形式の非過去形と過去形によって表現される、話し手のなんらかの態度を表すムードの用法を扱う。モンゴル語では、ムードの過去形はモーダ

[1] 本稿における「モンゴル語」とは中国内モンゴル自治区で使用されている標準語を指す。モンゴル語の表記は、清格爾泰 (1991)に従い、ローマ字転写したものである。グロス及び日本語訳は筆者による。

ルな意味と共に過去の意味を含んでおり、その過去であることの成り立ちが、例文 (1b) (2b) のように通常の過去とは異なる点にその特徴があると考える。

金水 (2001) によれば、日本語のムードの「タ」は静的述語表現にのみ現れ、静的述語の持つ意味論的・情報論的な性質から、ムードの「タ」の現象が自然に導かれるものであるという。日本語の静的述語表現とは、存在動詞「ある」とコピュラの「だ」を指している。モンゴル語の存在動詞とコピュラに当たるのは baiqu（辞書形）である。しかし、baiqu の過去形 bai-jai、bai-γsan によって表されるムードの用法および非過去形と過去形のムード用法の対比に言及した研究はまだ見られない。従って、本稿では、モンゴル語の内部を見ているだけで分からない側面を、日本語のムードの「タ」と対照させながら考察する。

1.2 研究の対象

日本語の静的述語とは、「ある」「いる」などの存在動詞、形容詞・形容動詞・名詞述語（名詞・形容詞・形容動詞＋断定の接辞ダ）を指す（金水 2001）。静的述語文は、状態的・継続的な性質を持つという述語による文の特徴がある。岩崎 (2002) でも指摘があるように、日本語では現在の状況と関連のある過去の一時点が焦点化された場合、現在の状況が過去の時点から存在していたように述べることは、状態性の述語にしか許されない。静的述語が表すことができる事態は過去からの事態である共に、現在（および未来）にも続いている事態である。これらが可能なのは状態を表す静的述語に限られるという。

(3) a. この椅子は昨日からここにある。
　　b. この椅子は昨日からここにあった。　（岩崎 2002:33）

例文 (3b) は、過去の事態として現在の事態から切り離して表現されている。岩崎 (2002:33) では、「現在（および未来）にも有効な過去の事態の、現在の事態からの切り離しということから、いわばムード的な意味が生じる」と述べている。

日本語のムードの「タ」には「発見」「思い出し」「知識の修正」といった用法がみられ、これらには状態を表す静的述語が用いられなければならないという語彙的制約が存在する（金水 2001、井上 2001、定延 2004 等）。岩崎 (2000) によれば、これらのムードの「タ」における述語は例文 (4) のように「いた」「かかっていた」「会議だった」などの静的述語に限られ、静的述語ではない場合には例文 (5b) の「開かれるんだった」のように「のだ」によって、いわば名詞述語に変化させる必要があり、そうではない場合は、例文 (5c) のように非文法的になる。

(4) a.（逃走した容疑者を見つけて）あそこにいたぞ。（発見）
　　b. あっ、鍵がかかっていた。（発見）　（岩崎 2000:32）

(5) a. あっ、そうだ、明日は会議だった。（思い出し）
　　b. 明日は会議が開かれるんだった。（思い出し）

c. *あっ、そうだ、明日は会議が開かれた。（思い出し）　　（岩崎 2000:32）

金水 (2001) によれば、静的述語の場合、当該の事態は話し手の知識とは無関係に、それが真である期間、〈特性〉として潜在する。〈特性〉は出来事と違って、時間を超越しているので、本来時間性を持たない。時間と関連づけられるためには、言語主体の直接経験のなかでそれがどのようにたち現れるかを除いてはあり得ないという。従って、動作述語（動的動詞）には、静的述語に特有な事態あるいは主体認識の変化の意味が感じられないとも言える。モンゴル語ではどうであろうか。例文 (6) で検証してみる。

(6) a. Teimü teimü, marγaši 2 čaγ-ača hural **bai-ǰai.**
そう そう 明日 2 時-ABL 会議 EX.V-PST
「そうそう、明日は 2 時から会議があった。」
b. Teimü teimü, marγaši 2 čaγ-ača hural-du orolčaqu yosotai **bai-ǰai.**
そう そう 明日 2 時-ABL 会議-DAT 出る 予定 EX.V-PST
「そうそう、明日は 2 時から会議に出る予定だった。」
c. * Teimü teimü, marγaši 2 čaγ-ača hural-du **orolča-ǰai.**
そう そう 明日 2 時-ABL 会議-DAT 出る-PST
「そうそう、明日は 2 時から会議に出た。」

モンゴル語でも例文 (6c) の orolča-ǰai（出た）という動作述語[2]を用いると非文法的であることから、静的述語 baiqu のテンス形式には、例文 (6a) (6b) のようにムード的な用法がみられると考えられる。従って、本稿ではモンゴル語 baiqu のテンス形式の表現を中心に論を進めていく。モンゴル語の baiqu は典型的な存在動動詞である他、コピュラ動詞の用法とテンス・アスペクトの接辞としての用法を持つ。その用法は次の通りである。

1) 存在を表す。

モンゴル語の baiqu は存在動詞として「ある」「いる」の意味を表す。日本語のように、主語が無生か有生かによって使い分けられることはない。

(7) a. Angi-dü sambar **bai-na.**
教室-DAT 黒板 EX.V-NPST
「教室に黒板がある。」
b. Minü aqa ger-tü **bai-na.**
私の 兄 家-DAT EX.V-NPST

[2] 寺村 (1984:107)は、日本語では、動作動詞（動的述語）に直接「タ」を付けたような用例は「ふつうは、ただの過去（または完了）と解釈されるだろう」としている。モンゴル語でも、静的述語とは違い、動作動詞の非過去形を過去形に換えるとただの過去（または完了）と解釈される。例えば、「yabuqu (行く)」と「yabu-ǰee/-γsan (行った)」を例に取れば、「Aa ! yaboqu uu ?（あっ！ 行くの？）」という非過去形の場合、現在・未来のテンスを表すのに対して、「Aa! yabu-ǰi/-γsan uu ?（あっ！ 行ったの？）」という過去形の場合は、ただ「行く」という動作が「過去」か「完了した」という意味で解釈される。

「私の兄は家にいる。」

2) 名詞や形容詞の後ろに現れ、コピュラ動詞として用いられる。
ただし、例文 (8b) では非過去形 bai-na は必ずしも必要ではない。口語では、例文 (8c) のように、いわゆるゼロコピュラ（Ø）で表現される（「ドルジ」と「教師」の間に少し休止 (pause) が入る）。

(8) a. Dorǰi baγši **bai-γsan.**
ドルジ 教師 COP -PST
「ドルジは教師でした。」
b. Dorǰi baγši **bai-na**.
ドルジ 教師 COP-NPST
「ドルジは教師です。」
c. Dorǰi baγši.
ドルジ 教師 Ø
「ドルジは教師だ。」

3) 副動詞語尾を伴う動詞や習慣を表す形動詞語尾 -dag などを伴う動詞の直後に現れ、アスペクトやテンスを表す分析的表現の後部要素として用いられる。

(9) Tede aǰilla-γsaγar **bai-na**.
彼ら 働き-CV.PROG EX.V-NPST
「彼らは働き続けている。」

この他、baiqu のテンスについての説明を補足する。存在・コピュラ動詞の baiqu という形は辞書形である。その非過去形は bai-na であり、過去形には bai-ba，bai-laa，bai-ǰai, bai-γsan の 4 種類がある。モンゴル語の過去接尾辞の使い分けについては一般的に以下のような特徴があるとされる。

-ba：終止形で用いられ、過去に起こった動作に対して用いられる。話し言葉ではあまり使用することがなく、新聞などの書き言葉によく使用される（フフバートル 1993）。

-laa：終止形で用いられ、過去に起こった動作に対して用いられる。また、フフバートル (1993:81) では、「動作を行う直前（近い未来）か直後（近い過去）を表す」という。

-ǰai / -čai：「話し手自身が確認していないできごと」もしくは「話し手がその事態を実際に経験したわけではない過去のできごと」に対して用いられる（山越 2012）。基本的には終止形で用いられるが、疑問詞などを接続することができる。その場合は、短縮した-ǰi の形で用いられることがある。それについて、Sanǰaa et al. (1987) でも、-ǰai

の母音が省略される場合があるという。また、ジンガン (2010) では、-ǰai の用法を以下のようにまとめている。

・発話時以前の出来事を述べる用法
・過去と比較する現在の用法
・未実現のことの心理上の実現を示す用法
・過去の事柄に関する新しい認識の形成する用法
・意外性を示す用法
・結果状態の描写用法

-γsan：連体形および終止形として用いられる。橋本 (1993) によると、終止形の -γsan には、時間軸上の過去時に事態を位置づけるテンス表示接尾辞 -ba/-laa/-ǰai と意味を変えずに 3 つの接尾辞を交替させることができるとする。動作の完了していることを示し、叙述用法の際には「過去」の意味合いが含まれるとする。

モンゴル語の過去接尾辞は上記のように、4 種類存在する。このうち -ba は単純過去を表し、ほぼ書き言葉のみに用いられるため、使用が限られる。また、-laa は動作を行う直前（近い未来）も表し、典型的な過去形の用法から外れている用法がある。そのため、-ba，-laa は本稿で扱う「ある静的事態が発話時である現在に成立しているにも関わらず過去形によって表現される」というムード用法にそぐわない。従って、bai-ba と bai-laa を除き、bai-ǰai，bai-γsan を本稿の考察の対象とする。

モンゴル語では存在・コピュラ動詞である baiqu が、日本語の静的述語のような役割を果たしている。本稿では、次のような baiqu の述語タイプで分類した用法について、例文 (1) (2) の過去形と非過去形で言い換えても意味が変わらない文を対象[3]とし、その表現上の相違に着目しながら考察していく。

1) 存在動詞 bai-＋非過去形／過去形：いる・ある／いた・あった
2) 動作動詞＋bai-＋非過去形／過去形：来ている／来ていた
3) 形容詞（形容動詞）＋bai-＋非過去形／過去形：元気だ／元気だった
4) 名詞＋bai-＋非過去形／過去形：女性だ／女性だった

1.3 研究の目的

本稿では、モンゴル語の baiqu のテンス形式によって表されるムード用法を、日本語のムードの「タ」と対照しながら、その特徴を探る。対象となるムード用法は、「発見」「思い出し」「知識の修正」である。

研究の目的をまとめると次の通りになる。

[3]「今、頭が痛い」という文のような場合には、時間的限定性を持ち、特定の時間と空間に展開される具体的な状態を指し、状態がまだ続いているため、「*今、頭が痛かった」と置き換えることはできない。本稿では、このようなテンスの対立が義務化している場合は対象外とする。

1) モンゴル語の baiqu にテンス形式によるムード用法があるかどうかを、存在動詞文、名詞・形容詞述語文で検討する。
2) 日本語の静的述語にしか現れない「発見」「思い出し」「知識の修正」におけるムードの「タ」の用法がモンゴル語 baiqu の過去形 bai-ǰai，bai-γsan にも存在するかどうかを検討する。また、ムード用法が存在する場合、baiqu の過去形 bai-ǰai と bai-γsan に相違が現れるかどうかも検討する。
3) 「発見」のムード用法があると言われている非過去形の bai-na（橋本・谷 1993）とその過去形 bai-ǰai と bai-γsan を対照することによって、それぞれの特徴を明らかにする。

2. モンゴル語と日本語の先行研究

本章では、モンゴル語と日本語の先行研究をそれぞれ見ていく。

2.1 橋本・谷（1993）

橋本・谷 (1993) によれば、モンゴル語における「未知・発見」は、探してみて、あった、なかった、という場合、あるいは聞き手が知らない新しい情報として、存在を告げる場合を指すとする。「既知・確認」は、探さなくても、あるかないかを知っている場合、あるいは聞き手がすでに知っている古い情報として、存在を告げる場合であり、表 1 のような心理的ニュアンスにより区別される。

表 1　橋本・谷 (1993:82)

	ある	ない
未知・発見	bajna	bajxgui bajna / alga
既知・確認	bij	bajxgui

しかし、非過去形の bai-na が新情報の「発見」で用いられるとは述べているが、その特徴と過去形の「発見」のムードについては言及されていない。

2.2 日本語のムードの「タ」について

ムードの「タ」に関してはこれまで様々な考察が行われてきたが、その流れは大きく分けると、純粋にムードを表す「タ」として位置づける立場（寺村 1984、森田 2001 等）と過去の表現と関連づけてムードと位置づける立場（井上 2001、定延 2004、金水 2001 等）がある。

本稿では、モンゴル語のムードの過去形はモーダルな意味と共に過去の意味を含んでおり、その過去であることの成り立ちが通常の過去とは異なる点にその特徴があると考える。従って、過去と関連付けてムードと位置づける立場の先行研究を挙げる。

2.2.1 井上（2001）

井上 (2001) では次のことが述べられている。

1)「タ」は発話時以前の出来事・状態であることを表す。
2) 日本語では、発話時以前のある時点で観察された（発話時以前に認識すべきだった、発話時以前に体験された）状態 p を発話時における同一の状態 p から切り離して独立に叙述することが容易であり、いわば、観察時の状態を前景化している。

2.2.2 定延（2004）

ムード（定延 2004 では「発見」、「思い出し」、「知識修正」に細分類されている）の「タ」の「タ」は、意味的に過去であり、テンスの「タ」（過去の意味することが明白に思える「タ」）との相違点は、「何が過去なのか」ということに尽きると述べている。つまり、テンスの「タ」は命題の成立する時点が過去であることを示す。それに対して、発見の「タ」は話し手が探索体験を行った時点が過去である時点を示す。思い出しの「タ」は話し手が問題の知識に触れた時点で過去を示す。知識修正の「タ」は話し手が古い知識を心内に登録した時点が過去を示すという。

2.2.3 金水（2001）

静的述語の特徴に関して、(10) のように考察し、前述のようなムードの「タ」と状態述語の本質が深く関わっていると述べている。

(10)「静的述語の場合、当該の事態は話し手の知識とは無関係に、それが真である期間、「特性」として潜在する。〈特性〉はいわば“もの”としての性質を持って、存在しているといってもよい。“もの”は出来事と違って、時間を超越しているので、本来時間性を持たない。“もの”が時間と関連づけられるためには、言語主体の直接経験のなかでそれがどのようにたち現れるか（あるいはたち現れなかったか）という点を除いてはあり得ない」（金水 2001:67-68）。

ある静的事態が発話時である現在に成立しているにも関わらず、ムード用法「発見」「思い出し」「関連付け」に「タ」が使われるのは静的事態と話し手との「出会い」の時が過去だからというわけである。

3. モンゴル語 baiqu のテンス・ムード用法

以下では、上述の「発見」「思い出し」「知識の修正」の順にモンゴル語の baiqu のテンス形式によって表現されるムード用法を日本語の「タ」と対照させながら考察していく。

3.1「発見」のムード用法

本稿では「発見」とは、ある状態が過去から現在にわたって継続していることに今気が付いたというムードの用法を指す。金水 (1998) では、「ル」形の表現は、単に眼前に対象が存在することを述べるに過ぎないが、「タ」形を用いるとずっと探していたものをようやく「見つけた」という気持ちが表されると述べている。では、モンゴル語ではどうであろうか。例文 (11) で検証してみる。

状況：探していた本がカバンの中に入っているのを見つけて
(11) a. ああ、ここに　ある／あった！
b. Aa！　ende　**bai-na / bai-ǰai！**
あっ　ここ　EX.V-NPST / EX.V-PST
「あっ！　ここに　ある／あった！」

モンゴル語も日本語と同様に表現することができる。例文 (11b) の bai-ǰai は、「探していた本がカバンの中に入っているのを見つけた」という意味で用いられている。それによって「本がカバンの中にある」という当該の事態が発話以前から発話以降にも続いていて、過去も現在も状態変化がないという解釈を保証するとともに、「ずっと探していたのになぜ見つからなかったのか」という発見と驚きを表している。しかし、例文 (11b) の bai-na は、単に眼前の対象に注目し、それが存在することを述べているにすぎない。日本語とモンゴル語では、例文 (12) のような相違も見られる。

状況：床にゴキブリがいるのを発見して
(12) a. あっ！　ゴキブリが　いる／いた。
b. Aa！　ǰoom　　**bai-na** / ? **bai-ǰai.**
あっ　ゴキブリ　EX.V-NPST / EX.V-PST
「あっ！　ゴキブリが　いる／いた。」

例文 (12) は、話し手が以前、家にゴキブリがいることを視覚などにより経験していて、ゴキブリが家にいるという知識を既に有している。そしてゴキブリを家から排除するためにゴキブリの存在に注意を払っている状況である。しかし、話し手にとって既存知識「ゴキブリが家にいる」と発話時に得られた新規知識「ゴキブリが家にいる」は同じであるため、話し手の既存知識と発話時において獲得した新規知識の間に、何の認識の変化も起きていない。このような状況で、日本語では「タ」形が使用されるが、モンゴル語では bai-ǰai が使用されない。

このような状況を定延 (2004) は、「環境（探索領域）はどんな様子かな？」という探索意識を活性化している状況であるとしている。探索意識が活性化するほど、話し手は情報を知識としてではなく、探索という認知体験として表現しやすいと述べている。例文 (13) の場合、「自宅にサルがいる」ということが想定しにくいため、日本語とモンゴル語のどちらも過去形が使用できない。日本語では例文 (14a) の場合、自宅よりも山中のようなよく知らない領域の方が、探索意識が活性化しやすく「タ」形は自然になると述べられている。しかし (14b) のように、モンゴル語ではこのような場合でも過去形は使用されない。

状況：自宅で思いがけずサルを発見した場合
(13) a. あっ、サルが　いる／ * いた。　（定延 2004:20　一部改変）

b. Aa！　samǰa　**bai-na** / * **bai-ǰai.**
あっ　サル　EX.V-NPST / EX.V-PST
「あっ！ サルが　いる／いた。」

状況：山中で思いがけずサルを発見した場合
(14) a. あ！サルが　いる／いた。　（定延 2004:20　一部改変）
b. Aa！　samǰa　**bai-na** / ? **bai-ǰai.**
あっ　サル　EX.V-NPST / EX.V-PST
「あっ！ サルが　いる／いた。」

ただし、モンゴル語では、「この山、ひょっとしてサルがいるのではないか」や「この山にはサルがいない」などの事前の想定や既存知識があり、かつ当該の事態を発見し、話し手に認識の変化が起こった場合には過去形が用いられる。

状況：この山にサルがいるかもしれないと想定していたところで発見した場合
(15) Aa！　üneker　samǰa　**bai-na** / **bai-ǰai**.　üǰee！
あっ　本当に　サル　EX.V-NPST / EX.V-PST　見て
「あっ！本当にサル　いる／いた。見て！」

状況：「この山にはサルがいない」という既存知識があって、発見した場合
(16) Aa！　samǰa　ügui　gesen，　**bai-na** / **bai-ǰai**．　üǰee!
あっ　サル　いない と言うが　EX.V-NPST / EX.V-PST　みて
「あっ！サルがいないと言っていたが、いる／いた、見て！」

例文 (15) は、「この山、ひょっとしてサルがいるのではないか」という事前想定に対して、「あ！ 本当にいた」、そして (16) は、「この山にはサルがいない」という既存知識に対して「いないと言っていたのに、いたよ」というように話し手の認識に変化が起こっているため、モンゴル語では過去形が自然になると思われる。bai-ǰai と bai-na を言い換えても情報を得た時点の眼前描写であることに変わりはない。しかし認識変化が起こった場合、発話時点に近い時にこそ、「発見」の bai-ǰai のモダリティ価値（驚き、意外性）がより強く出てくると思われる。

まとめると、モンゴル語の眼前事態における「発見」には、bai-ǰai が用いられる。それは、「目に見えている」という眼前描写から〈結果・状態の描写〉を行う場合と、〈認識の変化が起こっている〉という場合を bai-ǰai が表せるため、使用されると考えられる。

3.2「思い出し」のムード用法

「思い出し」のムードとは、過去において確定していた未来の行事・計画・予定を発話時に思い出した場合の用法を指す。本稿では、未来を表す時間副詞と共起する「思い出し」文を主に考察する。

状況：友人が外国に行くのは明日であることを思い出して

(17) Aa！ tegün-ü yabuqu edör marγaši **bai-na / bai-ǰai !**

あっ 彼-GEN 行く 日 明日 EX.V-NPST / EX.V-PST

「あっ！ 彼の出発日は明日 だ／だった！」

状況：手帳を見て思い出して

(18) Aa！ bara-γsan a , marta-γad bai-ǰai.

あっ 終わる-PST あ 忘れる-CV EX.V-PST

marγaši üneker qormila-γsan edör-ün bayar **bai-na / bai-ǰai !**

明日 本当に 結婚する-PST 日-GEN 記念 EX.V-NPST / EX.V-PST

「あっ！ しまった、忘れていた。明日本当は結婚記念日 だ／だった！」

モンゴル語では、未来副詞 marγaši（明日）が現れても過去形の bai-ǰai を用いることができる。bai-ǰai は、例文 (17) (18) のように「予定が存在していた」が「今になって思い出した」というような意味で用いられている。その他、例文 (19c) では、bai-γsan に ügui da（じゃないか）が後続し、「あったじゃないか」という意味で用いられている。これは bai-γsan が連体形で用いられる性質からこのような表現ができる。

(19) a. Marγaši üneker hural **bai-na**.

明日 本当に 会議 EX.V-NPST

「明日本当に会議がある。」

b. Aa ! bara-γsan a, marγaši üneker hural **bai-ǰai** ! či basa marta-čiqa-γsan ba ?

あっ 終わる-PST あ 明日 本当に 会議 EX.V-PST あなた も 忘れ-しまう-PST かな

「あっ！ しまった、明日本当は会議があった。あなたも忘れてしまったかな？」

c. Aa ! bara-γsan a, marγaši üneker hural **bai-γsan ügui da** ! marta-čiqa-γsan.

あっ 終わる-PST あ 明日 本当に 会議 EX.V-PST NEG か 忘れる-しまう-PST

「あっ！ しまった、明日会議があったじゃないか！ 忘れてしまった。」

例文 (19b) (19c) の bai-ǰai と bai-γsan ügui da は、例文 (19a) の bai-na の非過去形とは異なり、意外性を表し、話し手の「あっ！ しまった」というような差し迫った心境を表す。そのため、特に現在より近い未来を表す副詞である「午後」「明日」「来週」が共起しやすい。

例文 (19b) (19c) では「会議」は過去から予定されていた事実であり、翌日に「会議」という、話し手にとって間違いなくそうである「確実な予定」が存在するという事実を発話時点で思い出している。なお、bai-ǰai, bai-γsan ügui da が使用される場合は、「そういえば、しまった、本当に、確かに、やはり」という過去の時点での「予定」と関連させる語が共起しやすい。森田 (2001) によれば、日本語でもそもそも「タ」の意味とは過去や完了ではなく、確述意識（対象について間違いなくそうであるという話し手の気持ち）であり、そこから過去・完了や発見そのほかの態度が生じるという。

従って、過去に「確実な予定」が存在していたが、忘れたことにより、「会議の予定がない」という状況になり、そして、また思い出すことによって「会議の予定がない」から「会議の予定がある」というように、話し手の認識が修正され、認識の変化が起こっているということになる。そのため、過去形の bai-ǰai, bai-γsan ügui da を使用することができると思われる。

例文 (19a) の非過去形の場合は、「会議が明日であること」を思いついたと考えられる。例文 (20) のように、思い出しではなく、「思いつき」の場合には、結びつける過去の事態が存在しないため、bai-na が自然である。

(20) Aa ! sain　nige　arγa　**bai-na** / ***bai-ǰai**.
あっ よい　一つ　方法　EX.V-NPST / EX.V-PST
「あっ！ あるいい方法が　ある／あった。」

とっさの「思いつき」には、過去形は使用されないが、「思い出し」の場合には使用することができる。「思い出し」に過去形 bai-ǰai と bai-γsan ügui da が用いられるのは、現在との繋がりがある過去の出来事が話し手によって、既存の情報として位置づけられ、それを忘れたことにより、現在との認識的な繋がりが切れ、再び思い出した場合の表現であると言える。このような表現ができるのは、状態的・継続的な性質を持つ存在・コピュラ動詞（静的述語）のみであると考えられる。

3.3「知識の修正」のムード用法

本稿では、「知識の修正」とは聞き手の答えを修正する場合や正解を明かす場合のムード用法を指す。日本語において、定延 (2004) では「知識修正」、井上 (2001) では、「隠していた正解を明かす」用法と呼んでいる。

状況：「1 から 4 番のどれが正解か」という質問に対する回答者の答えを修正する場合
(21) a.　正解は 3 番 です／でした。
b.　Taγaraqu-ni　bol　γurabadugar.
正解-3RD　は　3 番目　Ø
「正解は 3 番目」
c. ? Taγaraqu-ni　bol　γurabadugar　**bai-ǰai.**
正解-3RD　は　3 番目　COP-PST
「正解は 3 番目でした。」

例文の (21a) のように、日本語では「ル」形でも「タ」形でも表される。井上 (2001:150) では、「話し手は聞き手が以前推論を行った場面に遡って、聞き手が以前推論を行った時は本当は…3 番だったという線で聞き手の認識を再調整させるために「タ」が用いられる」と述べている。

モンゴル語では、(21c) の過去形よりも、一般的に (21b) の非過去形が用いられる。そ

れは、話し手が聞き手の知識までを修正することができないためだと思われる。しかし、次のように話し手自身の知識を修正する場合であれば過去形を自然に用いることができる。

状況：話し手が「答えは 3 番」と予想していて、それが正解であると分かった時

(22) Xasil　γurbadugar-ni　**bai-ǰai** !
やはり　3 番-3RD　COP-PST
「やはり、3 番だった！」

状況：話し手が「答えは 3 番ではない」と予想していて 3 番と正解が分かった時

(23) Ünendegen　γurbadugar-ni　**bai-ǰai** !
本当は　3 番-3RD　COP-PST
「本当は 3 番だった！」

例文 (22) (23) では、「これまで、確信を持てなかった」、「これまで誤解していた」という意味で話し手自身の答えを修正している。話し手が回答する前に、当該の事態に対する予想や既存の知識があり、そして答えを知り、話し手に「知識の修正」という認識の変化が起こった場合には bai-ǰai を用いることができる。従って、モンゴル語においては、話し手が聞き手の知識までは修正することはできないが、話し手自身の知識は修正することができると言える。

4. baiqu の非過去形と過去形のムード用法

baiqu のテンス形式の非過去形 bai-na と過去形 bai-ǰai によって表現されるムード用法を日本語と対照しながら、それぞれ見ていく。

4.1.1 非過去形のムード用法

思いかげない事態に遭遇した場合はどう表現するだろうか。例文 (24) で検証してみる。

(24) a. Aa ! ende　ǰoγos　**bai-na** / ***bai-ǰai**.
あっ　ここ　お金　EX.V-NPST / EX.V-PST
「あっ！　ここにお金が　ある／あった。」
b. Aa ! ǰoγos.　/　Aa !　ǰoγos ***bai-ǰai.**
あっ お金　Ø /　あっ お金　COP-PST
「あっ！　お金だ。／あっ！　お金だった。」

眼前事態描写において、例文 (24) のように、思いがけない事態である「お金」の出現を話し手が認識し、直ちに言語化する場合には bai-ǰai が用いられない。知らなかったある事実が目の前に存在するという事実の現在の断定である場合は非過去形が用いられる。

また、思いがけず所有対象物を「発見」した場合はどうであろうか。定延 (2014) では、日本語では探索意識を持っていなければ、所有表現でも発見の「タ」は不自然であると述

べている。

状況：列車で、向かいの座席の人間の顔にほくろを発見して
(25) a.　あ、あんなところにほくろが**ある**。
　　b. ??あ、あんなところにほくろが**あった**。　　（定延 2014:21）

列車の中で、向かいの座席の人間の顔を何気なくみてホクロを発見した場合、「ある」と言えても、「あった」とは言い難い。これは、列車でたまたま向かいに座った人間に対して、ことさらに「この人はどのような顔しているのだろうか」と探検意識を持つことが不自然だからである（定延 2014）。

モンゴル語において、思いがけず所有対象物を「発見」した場合はどうであろうか。風間 (1991) によると、体から分離不可能な所有物、例えば、「目」や「髪」などである場合には、例文 (26) のように、普通は、所有接辞の -tai による構文が用いられ、存在動詞による構文は用いられない。存在文が用いられると、(26b) のように「かつらか何かが家のどこかに保存してある」かのようであるという。

(26) a.　Tere　　urtu　　gejige-tai.
　　彼女は　長い　　髪を持っている
　　b. ?? Tere　　kümün　urtu　　gejige　　baina.
　　あの　　人　　長い　　髪が　　ある　　（風間 1991:98）[4]

しかし、例文 (27) のように、それが眼前描写の「発見」の場合になると、分離不可能所有物でも、存在動詞で表現できる。

(27) a. öoi !　　tere　　kümün　γurba-n　　nidü-tai.
　　あれれ　あの　　人　　3 つ-GEN　目-PROP
　　「あれれ！　あの人 3 つの目持ちだ。」
　　b. öoi !　　tere　　kümün　γurba-n　　nidü　　**bai-na !** / ***bai-ǰai !**
　　あれれ　あの　　人　　3 つ-GEN　目　　EX.V-NPST /EX.V-PST
　　「あれれ！　あの人 3 つの目がある！」

思いがけず発見した場合は、分離不可能所有物でも、例文 (27b) でみるように、bai-na を用いることができる。しかし、思いがけない「発見」として bai-na が用いられるのは、普通所有物（誰でも持っている）ではなく、非普通所有物に（誰でも持っているとは限らない）限られる。

また、例文 (27b) でみるように、所有表現における、「発見」の眼前事態の描写においては、過去形 bai-ǰai は用いられない。「思いがけない」ということ自体、現在の事態と結

[4] ローマ字転写は本稿に合わせ、一部改変したものである。

びつけられる直接的な過去との関連（＝事前の予想と既存知識）がないということなので、話し手は現在のことを過去との関連と結び付けて捉えられない。そのため、過去形は不自然である。

探索意識を活性化すると、モンゴル語では所有対象物を「発見」した場合に bai-ǰai が使用可能であろうか。例文 (28) で検証してみる。

状況：話し手が頭の後ろに白髪があるかどうかが気になって

(28) a. Bi basa čaγan üsü baiqu bol uu？ üǰe-ged ögkü üü？
私 も 白い 髪 EX.V かな 見る-CV くれる Q？
「私も白髪があるのかな？ 見てくれる？」

b. Aa！ **bai-na** / ?**bai-ǰai.**
あっ EX.V-NPST / EX.V-PST
「あっ！ ある／あった。」

c. Aa！ üneker **bai-ǰai.**
あっ 本当に EX.V-PST
「あっ！ 本当にあった。」

モンゴル語では、「あるかな」あるいは「ないかな」と探索してみた場合、(28b) のように、非過去形 bai-na が使用される。すなわち、日本語は索意識を持っている場合には「タ」形が使用されるが、モンゴル語では過去形が使用されない。しかし、「こんなに若いのだからまさか白髪なんてない」と想定していたところで白髪を発見した場合は、(28c) のように bai-ǰai という過去形が使用される。それは、「白髪がない」という事前の想定から「白髪がある」というように、認識の変化が起こったためだと考えられる。

また、工藤 (2014) では、例文 (29) のように、否定的な評価感情が前面化する場合には非過去形しか用いられないと述べている。

(29) a.あなた何を 言っているの！／*言ったの！ （工藤 2014:169 一部改変）

b. Či yuγu kele-ǰu **baiqu / bai-na** bui ! / ***bai-γsan** bui !
あなた 何 言う-PROG EX.V /EX.V-NPST Q EX.V-PST Q
「あなたは何を言って いるの！／いたの！」

モンゴル語でも、日本語と同様に、聞き手が過去に言ったことに対して、非難の感情を表す際に、辞書形の baiqu あるいは非過去形 bai-na の形で使用され、「何、なぜ、どうして」のような疑問詞が共起する。

以上の考察から、bai-na は次のような場合に用いられるとまとめることができる。

1) 探索意識が活性化している場合。{例文(14)(28)}
2) 思いつきの場合。{例文(20)}
3) 聞き手の知識を修正する場合。{例文(21)}

4) 潜在的な想定・既存知識を有しない、思いがけない状況における発見の場合。分離不可能な非普通所有物の所有表現であっても用いることができる。{例文(24)(27)}
5) 否定的な感情が前面化している場合。{例文(29)}

4.1.2 過去形のムード用法

定延 (2010) によれば、日本語では話し手は事態の情報をどのように得たかにより、「タ」の使用が許可される場合があると述べている。

(30) 兄：タイムマシンで 600 年前の世界に行って、ピサの斜塔で遊ぼうよ！
弟：そりゃあいいや！ ピサの斜塔って、いまから 650 年前にできたんだよね。
600 年前ならピサの斜塔も築 50 年で、**新しい**からね。　（定延 2010：12）
(31) 兄：タイムマシンで 10 年前の世界に行って、おばあちゃんと遊ぼうよ！
弟：そりゃあいいや！ 10 年前ならおばあちゃんも**元気だった**からね。
（定延 2010：12）

例文 (30) は体験したことではなく予測したことである点が、(31) の体験したことと異なる。普通、話し手が直接に体験した事態であれば、その情報を得た時点を発話時である現在より以前に置いて (31) のように、「タ」形で表現するのは自然である（定延 2010）。ではモンゴル語ではどうであろうか。例文 (32) (33) で検証してみる。

状況：話し手が犯人を目撃した状況を振り返って
(32) a. 女性　です／でした。
b. Emxitei　hümün.
女　　人　Ø
「女性です。」
c. Emxitei　hümün　**bai-ǰai / bai-γsan.**
女　　人　COP-PST / COP-PST
「女性でした。」

例文 (32c) のように、モンゴル語でも目撃者が、生涯変わることのない情報（犯人の性別）を過去形で表現するのは、目撃者の得た体験時点（「犯人は女性」という命題情報をえる時点）が過去という想定が自然だからである。また、体験の時点に得た既存知識である「犯人は女性」という情報は、現在振り返って得られた新規知識である「犯人は女性」という情報が同じであるため、話し手にとって、何の認識変化も起こっていない。まとめると、話し手に認識の変化が起こっておらず、体験の時点が過去である場合に bai-ǰai と bai-γsan のどちらも使用可能なのである。

状況：家に帰って姉が来ていることに話し手が気付いて母親に話す場面

(33) Aa！ egeči basa ire-ged **bai-na / bai-ǰai/ bai-γsan** siu.
あっ 姉 も 来る-CV EX.V-NPST / EX.V-PST / EX.V-PST よ
「あっ! お姉ちゃんもきて いる／いた よ。」

例文 (33) の非過去形は眼前の事実の描写であり、過去形は例文 (32) と同様に、体験時点が過去であることからの描写である。話し手の体験から過去形が用いられる点は、日本語とモンゴル語で共通しているが、次のような相違も見られる。

状況：友人を訪ね、病気であることに気づいて
(34) a. 病気 なのか／だったのか。 （松田 1998:77）
b. Ebčhin-tai uu.
病気-PROP Q
「病気なのか」
c. Ebčhin-tai **bai-ǰi** uu. / **bai-γsan** yum uu.
病気-PROP COP-PST Q / COP-PST の Q
「病気だったのか」

松田 (1998) によると、日本語では眼前描写の「ル」形文と「タ」形文で意味づけられる事態解釈の違いは、過去の時点への遡りの意識を含むか否かにあるという。「ル」形文は眼前事態に注視しているが、「タ」形文は過去との関わりを積極的に認識している。話し手の視点を聞き手の過去時の状況まで拡大した語り方になり、聞き手の過去の時点に注意を向け、「知らなかった」「もっと早く気付くべきだった」などの配慮の気持ちを表すことができると述べている。

また、工藤 (2014) によると、予想外のことを知ったという意外な新事実の発見について「タ」形が使用され、話し手の驚きと意外な気持ちを表しているという。例文 (34c) のように、モンゴル語でも日本語と同様に、意外な新事実を発見したという意味では過去形が使用されるが、日本語のような配慮の気持ちまでは表すことができない。

以上の考察から baiqu の過去形が用いられる場合を次のようにまとめることができる。

1) 事前の潜在的な想定や既存知識があり、当該の事態を発見し、話し手に認識的変化が起こった場合。{例文(15)(16)}
2) 過去に予定されていた「確実な予定」を思い出した場合。{例文(18)(19)}
3) 話し手自身の知識を修正する場合。{例文(22)(23)}
4) 体験を通して発見した場合。{例文(32)(33)}
5) 意外な新事実を発見した場合。{例文(34)}

以上、baiqu の過去形である bai-ǰai と bai-γsan がムード的に用いられることが観察できた。どちらも「心的過去」を表すことができると思われる。「心的過去」とは、時間的過去と違って、話し手の主観的な領域を主な舞台とする。その非現実世界における時間的過

去は、現実世界の客観的な時間軸と異なっている。モンゴル語 baiqu の過去形 bai-ǰai と bai-γsan が、「思い出し」においては、未来時制を表す副詞と共起できるのは、「心的過去」を表しているためであると考えられる。bai-ǰai と bai-γsan は、「心的過去」については共通している。しかし、両者には以下のような相違点が見られる。

bai-ǰai：bai-ǰai は bai-γsan より「発見」の〈結果・状態の描写〉の〈結果性〉および「思い出し」の過去に予定されていた〈確実な予定〉の〈確実性〉を表現できる性質を持っている。そしてその性質から次のように認識的なの変化が起こった場合に用いられる。

「発見」：事前の潜在的な想定や既存知識から認識の変化が起こった場合。

「思い出し」:「確実な予定」を忘れたことから「予定がない」という状況になり、そして思い出すことによって「予定がある」というように認識の変化が起こった場合。

「話し手の知識の修正」：事前の予想や既存知識から認識の変化が起こった場合。

bai-γsan：連体形で用いられることおよび〈心的過去〉を表せる性質から、ほかのモダリティ接辞、思い出しには ügui da（じゃないか)、新事実の発見には yum uu（のか）と共起している場合に用いられる。

5. おわりに

本稿では、日本語において静的述語にしか現れないムードの「タ」における「発見」「思い出し」「知識の修正」の用法をモンゴル語の存在動詞文や名詞・形容詞述語文と対照・考察した結果、モンゴル語にもムード的用法があるということが分かった。基本的に baiqu のテンス形式によって、思いがけず発見された事実（所有表現も）と探索意識が活性化している場合には非過去形が用いられる。一方、その事実に過去との関連（＝事前想定・既存知識）があり、かつ認識の変化が起こった場合には過去形が用いられる。その用法を日本語のムードの「タ」と対照すると、表 2 のようになる。

表 2 日本語とモンゴル語の対照

ムード	思いがけずの発見	認識変化のある発見	思い出し	聞き手に対しての知識の修正
日本語	ル形	タ形	タ形	タ形
モンゴル語	-na	-ǰai	-ǰai / -γsan-ügui da	-na

日本語とモンゴル語の共通点および相違点は、次のようにまとめることができる。

・共通点

1) 潜在的な想定・既存知識を有しない、思いがけない状況における発見の場合は、bai-na と「ル」形。{例文(24)(27)}

2) 否定的な感情が前面化している場合は bai-na と「ル」形。{例文(29)}
3) 体験を通して発見した場合はと bai-ǰai あるいは bai-γsan と「タ」形。{例文(32)(33)}
4) 意外な新事実を発見した場合は bai-ǰai あるいは bai-γsan yum uu と「タ」形。{例文(34)}
5) 過去に予定されていた「確実な予定」を思い出した場合は bai-ǰai あるいは bai-γsan ügui da と「タ」形。{例文(18)(19)}

・相違点

1) 話し手は発話時において実現されている事態と関係がある知識を持っていて、当該の事態を発見し、話し手の既存知識と発話時において獲得した新規知識の間に何も認識の変化は起っていない場合、日本語は「タ」形が使用されるがモンゴル語では baiqu の過去形 bai-ǰai および bai-γsan は使用されない。{例文(12)}
2) 日本語では、探索意識が活性化すれば、「タ」形は自然であるが、モンゴル語では、その場合でも baiqu の非過去形が使用される。{例文(14)(28)}
3) 知識の修正において、聞き手の知識を修正する場合、日本語では「タ」形が使用されるが、モンゴル語では話し手自身の知識を修正する場合に限って、過去形が自然になる。{例文(21)(22)}
4) 日本語の「タ」形の新事実発見においては、過去への配慮の気持ちが入っているが、モンゴル語では配慮の気持ちまでは、込められていない。{例文(34)}

baiqu（存在・コピュラ動詞）の過去形である bai-ǰai と bai-γsan のどちらも未来を示す副詞と共起し、「心的過去」を表すことができる。しかし、bai-ǰai は bai-γsan より「発見」の〈結果・状態の描写〉の〈結果性〉および「思い出し」の過去に予定されていた「確実な予定」の〈確実性〉を表現できる性質を持っている。そしてその性質から話し手にとって、認識の変化が起こった場合の「発見」「思い出し」「話し手の知識修正」に使用される。bai-γsan は bai-ǰai とは異なり、連体形でも使用される性質から、ほかのモダリティ要素、例えば「思い出し」には ügui da（じゃないか）、「新事実の確認」には yum uu（のか）と共起している場合に使用される。

テンス・ムード用法における、bai-ǰai, bai-γsan の地域方言の差による、使用の相違を探ることは今後の課題としたい。

略記号

ABL：奪格／COP：コピュラ動詞／CV：副動詞語尾／CON：仮定／DAT：与位格／EX.V：存在動詞／GEN：属格／NEG：否定形／NPST：非過去形／PROG：継続形／PROP：所有接辞／PST：過去形／ Ø：ゼロコピュラ／Q：疑問小辞／3RD：第三人称

謝辞

研究全般のご助言をいただいた栗林裕先生、本稿の執筆に当たって有益なコメントをくださった先生方、そして貴重なコメントをいただいた査読者の方々に、この場を借りて厚

くお礼を申し上げたい。当然ながら本稿における不備はすべて筆者に帰するものである。

参考文献

岩崎　卓 (2000)「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『日本語学』19-5 pp.28-39

井上　優 (2001)「現代日本語の「タ」－主文末の「タ」の意味について」つくば言語文化フォーラム（編）『「タ」の言語学』pp.97-163 ひつじ書房

風間伸次郎 (1991)「アルタイ諸言語のいくつかにみられる所有／存在を示す一形式について」『アルタイ学報』第 9 号　pp.93-124

金水　敏 (1998)「いわゆるムードのタについて－状態性との関連から－」『東京大学国語研究室創立百周年記念　国語研究論集』pp.170-185

金水　敏 (2001)「テンスと情報」『文法と音声 3』pp.55-79 くろしお出版

工藤真由美 (2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房

定延利行 (2004)「ムードの「た」の過去性」『国際文化研究』第 21 号 pp.1-68

定延利行 (2010)「「た」の発話をおこなう権利」日本語／日本語教育研究会（編）『日本語／日本語教育』pp.28-38 ココ出版

定延利行 編 (2014)『日本語学と通言語的研究との対話－テンス・アスペクト・ムード研究を通じて－』くろしお出版

Sanǰaa, J. et al. (1987) Üil ügiin čagaar tögsgöx nöxčöl, in: Byambasan, P. et al. *Orčin čagiin mongol xelnü üg züin baiguulalt*. ulaanbaater : BNMü ardun bolovsrolun yaamnu surax bičig ,setguuliin negdsen redakčun gazar. pp.158-174

ジンガン (2010)「モンゴル語のモダリティ：コーパスに基づく記述研究」東京外国語大学博士論文　http://hdl.handle.net/10108/64060

清格爾泰 (1991)『蒙古語語法』内蒙古人民出版社

寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版

橋本 勝 監修／谷 博之 編 (1993)『モンゴル語文法・講読』モンゴル語研修テキスト(1) 東京外国大学アジア・アフリカ言語文化研究所

橋本邦彦 (1993)「<-san>の意味論 ： 1 つの形式と複数の意味の対応について」『室蘭工業大学研究報告　文科編』第 43 号 pp.49-94

フフバートル (1993)『モンゴル語基礎文法』たおフォーラム

松田文子 (1998)「眼前事態描写における「タ」の機能－過去への遡りを要請する「タ」－」『日本語教育』第 97 号 pp.72-82

森田良行 (2001)「確述意識を表す「た」」『月刊言語』第 12 号 pp.30-31

山越康裕 (2012)『詳しくわかるモンゴル語文法』白水社

Tense and Mood Use of the Existential/Copula Verb in Mongolian: a Comparison with Japanese *ta*

Ling YAN
(Graduate School, Okayama University)

This paper investigates the mood use, such as “discovery”, “recall”, and “modification of a previous assumption”, of the past forms of the state verb *baiqu* in Mongolian.

Basically, a non-past form is used when the speaker discovers something without any previous knowledge of it, and a past form is used when confirming/ modifying a prior assumption or an existing knowledge. *Bai-jai* is usually used for “discovery”, “recall”, “modification of the speaker’s previous assumption” when the modification itself actually occurs due to the recall. *Bai-ɣsan* instead is used in conjunction with other modality affixes, as it owns an adnominal form.

A comparison reveals that in Japanese the past form *-ta* is used for “actual discovery”, “confirmation of a previous knowledge” and “modification of a previous assumption of the listener”, while in Mongolian the non-past form *baiqu* is used in the same situations.

（れい・えん　reien1014@gmail.com）